

ウィトゲンシュタインにおける 「唯一の論理」の行方

米 田 雄 哉

序論

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein 1889-1951) の前期思想を代表する著作『論理哲学論考 *Tractatus logico-philosophicus*』(以下『論考』)については、その執筆意図をめぐって、今日に至るまで議論が交わされてきた。吉田寛に従えば、その解釈は、大別すると、①論理的解釈、②倫理的解釈、③超越論的解釈、④治療的解釈、これら4つの立場に区別することができる^①。

①の立場はもっとも初期の立場である。②の立場は、ウィトゲンシュタインの死後に公刊された資料を用いながら、改めてウィトゲンシュタインの『論考』の目的が論理学的な事柄に尽きるのではなく、倫理的な事柄にあることを強調するものである。③の立場は、上記二つの立場を包摂する形で、『論考』に見られるウィトゲンシュタインの体系の超越論的側面を強調する。そして、④の立場はもっとも近年の立場であり、これまで見てきた①～③の立場すべてに対して否定的な立場を採る『論考』解釈を提示する。この④の立場は、『論考』には、保持されるべき哲学的主張は何ら存在しないと解釈する^②。

ウィトゲンシュタインはどのような意図を抱いて『論考』を執筆したのか。この観点から『論考』を検討するのであれば、本稿は③の立場が事実に近いと考える。それは、ウィトゲンシュタイン自身が『論考』における思想を、その執筆後すぐに放棄していないと理解できるからである。なるほど、彼が前期思想から後期思想へ移行する際、『論考』における「唯一の論理」や「唯一の言語」から離脱することが指摘される^③。この離脱は中期から後期にかけての彼の思想に目立つことである。しかし私見では、『論考』に見られたこれらの考えは中期においてすぐに捨てられたのではない。前期思想から中期思想への移行の際に、破棄されず維持された。

「唯一の論理」という考えは、このように『論考』の執筆意図の解明にも寄与しうる、ウィ

トゲンシュタインのきわめて重要な考えである。そこで本稿では、この「唯一の論理」という考えに焦点を当てる。『論考』に基づきその考えの内実を問い、それを明らかにしたうえで、中期ウィトゲンシュタインがそれをどのように扱ったのかを論じることにはしたい。つまり、最終的には、「唯一の論理」の行方を、ウィトゲンシュタインの中期の立場までに限定することにはなるが、明らかにすることをめざしたい。

本論文において、私は以下のように議論を展開する。まず、「唯一の論理」を明らかにするために、『論考』における論理の役割という観点を考慮しつつ、『論考』の全体の目的と方法から、論理が世界と言語に対して秩序付けを行う役割を担っていることを示したい。この役割を担う論理は、『論考』において、世界との関係で理解されねばならず、そのために恣意的な道具ではないことを指摘する（第1章）。次いで、前章で論じた論理がなぜ唯一であるのかを論じる。そのために、第1章において非恣意的であるとされた『論考』における論理の存在論的位置を明確にする。この考察によって、論理は世界の内に、対象に依拠する形で位置付けられていることが確認される。さらに論理が唯一であることを、内在的側面と外在的側面の観点から究明する（第2章）。最後に、これまで論じてきた「唯一の論理」という思想が、中期ウィトゲンシュタインの思想において、どのように扱われたのかを考察する。そのために、私は、彼が取り組んだ色命題に関する問題を扱い、「唯一の論理」ととの関係を示す。そして、『論考』の目的は破棄されるが、しかしその目的の前提であった「唯一の論理」は、それ自体としては、復帰後においても「文法」概念へと包摂される形で維持されていることを指摘する（第3章）。

第1章 『論考』における論理の役割

第1節 『論考』の目的と方法

『論考』の目的は、思考の限界を明らかにすることである。その目的を遂行するにあたり、ウィトゲンシュタインは思考する際に我々が用いている言語に注目する。

ウィトゲンシュタインが行うのは、言語批判である。『論考』における言語批判は、命題の見かけ上の論理形式が現実の論理形式とは異なっていることを明らかにするという目的を有する。

言語批判は、単に言語の分析に終始するものではない。分析結果としての命題の一般形式は、言語の本質のみならず、世界の本質を提示するとウィトゲンシュタインは考えている。『論考』で展開される、言語を通して世界へと至る言語批判を、飯田隆は「存在論の方法としての言語分析」と特徴づける^④。M・ポッターは、世界の特徴をシンボル（Symbol）から引き出す考えを、ウィトゲンシュタインのシンボルの転回（Symbolic turn）の特徴として指摘している^⑤。

このように存在論の方法としての言語分析が可能であるのは、端的に述べると、言語と世界

が論理という共通の土台を有しているためである。そのため、『論考』においては、言語論と存在論が扱われる。

この考察において重要な位置を有するのが、「論理空間 (logische Raum)」である。論理空間は、『論考』が想定するすべての論理的可能性を包含する概念である。論理空間は、『論考』における可能的事柄の領域を取り扱うための鍵となる概念である。

次節から論じる言語論と存在論は、論理空間を土台として構築される。言語論においては、言語の限界を定める概念として働き、存在論においては、世界の限界を定める概念として働くのである。論理空間のこの働きが、論理がそれぞれの秩序づけの原理である。

第2節 論理形式と内的関係——言語論における役割

『論考』において、「言語」は「命題の総体 (die Gesamtheit der Sätze)」として規定される(『論考』, 4.001)。この命題の総体としての言語を扱う『論考』の言語論は、大別すると二つの考察に区別できる。一つはいわゆる「像理論」であり、もう一つは「真理関数論」である。前者は命題の有意義性と真偽概念を定め、後者はその拡張として、有意義な命題の限界を画定する。

ところで、E・ステニウスと野村恭史によれば、^⑥像理論には区別されるべき2つの側面がある。一方の側面は「命題についての像理論」と、他方の側面は「言語についての像理論」と、それぞれ呼ばれうる。前者の側面は、有意味な命題は「現実」における事態 (Sachverhalt) の構造と一致するという、像理論の側面である。主に命題についての像理論である。後者の側面は、命題の全体に関わる像理論の側面である。本稿もこの区別に従う。

命題についての像理論は、端的に「命題は現実の模型 (ein Modell der Wirklichkeit) である」(『論考』, 4.01) と述べられる。したがって、像の意義は「像が描写するもの」なのである(『論考』, 2.221)。その上で、真偽概念は「像の意義と現実との一致・不一致」として規定される(『論考』, 2.222)。命題が現実の像たりえるのは、現実の要素である対象と、像の要素との対応^⑦による。この対応関係を写像関係と呼ぶ(『論考』, 2.1514)。写像関係により像の要素が定まり、像は現実について語ることができる。

像による現実の写像にとって重要となるのは、言語と現実が共通の形式、即ち論理形式を共有していることである。この論理形式の共有によって、像は、現実と同様の分節性を有し、現実の可能性を表現することができる。

命題についての像理論は以上のように理解される。像理論のこの側面に対して、言語についての像理論は、どのような特徴をもつと言えるのだろうか。その特徴は、諸命題間の内的関係は現実の内的関係の反映であるという点にある。これは以下のウィトゲンシュタインの主張に

による。

論理はすべてを包括し世界を反映するにも拘わらず、いかにしてかくも特殊な鉤印や操作法を使用しうるのである。専ら、これら全てが結び付けられて一つの無限に細かな網の目、大きな鏡と、なることによるのである（『論考』, 5.511）。

真理関数論では、この言語についての像理論の導出関係によって言語の限界が示されることになる。

『論考』の目的に従えば、真理関数論の要となるのは、真理表を用いて命題の構成限界を示すことであろう。先の像理論において命題の意義が真偽として定められ、真理関数論においては、その真偽配列の組み合わせを機械的に確認することができる。このために要請されるのが、要素命題の論理的相互独立性である。真理関数論の考察は、最終的に、『論考』の命題6における命題の一般形式（Die allgemeine Form des Satzes）の提示へと至る。命題の一般形式は、 $[\bar{p}, \bar{\xi}, N(\bar{\xi})]$ として提示され、最初の二つの項はそれぞれ要素命題と要素命題の集合を意味する。そして、最後の項は、要素命題の集合に対して、否定連言の操作を加えることである。この命題の一般形式は命題の本質であり（『論考』, 5.471）、さらには世界の本質を陳述（angeben）する（『論考』, 5.4711）。

『論考』において、言語の最も基本的な単位は、要素命題である。論理定項を含む複合的命題は、要素命題に対して真理操作を適用することによって構成される。第二章で扱うが、ウィトゲンシュタインは論理定項に対応する論理的对象は存在しない（論理定項の削除）と考える。そのため、命題において、「 $p \vee q$ 」といった形で現われる論理定項「 $\vee$ 」は意味を欠く。こうした表記の代わりに用いられるのが、真理表（truth-table）である。ここで述べられている命題間の内的関係こそが彼の想定する「論理」に外ならない。というのも、論理定項を真理操作に置き換えた『論考』においては、論理的関係は真理操作によって表現されるためである。

以上をまとめると、像理論に従えば言語が現実について語ることができるのは論理形式を共有しているからであり、真理関数論によって命題の全ては命題の一般形式によって構成されることになる。この言語論における論理の働きは、まず対象と名の対応関係によって共有される側面と、諸命題の構成を可能としている内的関係の反映という二側面を有すると理解できる。したがって、命題の一般形式 $[\bar{p}, \bar{\xi}, N(\bar{\xi})]$ は、言語の構文論を示していると考えられることができる。

第3節 世界を秩序付ける論理——存在論における役割

『論考』における「世界 (Welt)」は、論理空間内の成立している事態の総体、すなわち事実 (Tatsache) の総体として規定される (『論考』, 1)。こうした存在論的概念は、さらに構成要素としての対象から成るとされる。

しかし、『論考』における世界という言葉の用いられ方は、上記の使用法に尽きない。『論考』に従えば、(1)事実の総体としての世界、(2)論理と限界を同じくする世界 (論理空間としての世界)、(3)経験以前に想定される世界の三点が考えられる^⑧。これらの内、存在論において述べられているのは(1)であり、限界が問題となる際は(2)が中心となっている。

前節で述べたように、論理が言語に関わるのは、構文論的な秩序付けとしてであった。しかし、その構文論的秩序付けを担う論理形式は現実と共有されているのであり、また内的関係についても現実の内的関係を言語は反映しているのであった。

言語論における役割を考慮すると『論考』における世界への論理の関わりは、主として以下の三点として理解できる。

- ① 論理は「いかに」には先立つが (vor dem Wie)、「何が」には先立たない (vor dem Was)。
- ② 論理は世界を満たしている。
- ③ 論理は超越論的である。

上記の①については、論理は「何かがかくある、といったいずれの経験よりも前にある」と言われ、さらには「論理は「いかに」の前にあるものの、「何が」の前にあるのではない」 (『論考』, 5.552) とされる。この一文は、以下のように理解できる。「いかに」というのは対象同士の配列についてであり、「何が」というのは、何らかの対象が存在することである。論理が、これまで見てきたように諸命題の相互関係である限り、そこには対象を基礎として事態ないしは事実がなければならない。したがって、何かが存在しなければそもそも関係する事柄もなく、論理的な関係についても存在するとは言えないことになる。したがって、論理は「何が」の前にあるのではなく、「いかに」の前にあるといわれることになる。

②に関しては、「論理は世界を満たす。世界の限界は論理の限界でもある」 (『論考』, 5.61) と述べられている。論理が世界を満たすというこの主張は、本稿でこれまで見てきた『論考』理解に基づけば、それは諸事態間に内的関係が成立していることだと理解できる (『論考』, 4.125)。この内的関係は諸命題の構造の関係と言い直される (『論考』, 4.122)。ここで述べられている内的関係は、存在論における諸事態間の内的関係であり、諸命題間の内的関係はその内的関係を示しているのである。真理関数論では、この可視化として真理表が用いられた点に触れたが、

この真理表によって帰結関係を見て取ることができることこそが、『論考』によればまさに内的関係が示されていることになる。この内的関係が、先にも述べた通り、論理的関係であると理解できる（『論考』, 5.2-5.23）。

また、「世界を満たす」という表現は、「論理的足場が論理空間に行き渡っている（reach through）」という表現によって置換される（『論考』, 3.42）。この足場が論理空間に行き渡っているからこそ、成立している事実の総体が、成立していない事態を規定することができるのであり（『論考』, 2.04）、これによって先に見た、世界と論理の限界が一致すると述べる一文も理解できる。

③の特徴として、最終的に6.13において、論理は「超越論的」とであると主張されるに至る。ウィトゲンシュタインは、この超越論的という言葉をもとに、「世界の条件」と解している^⑨。これまで見た論理の特徴付けから考える場合、ここでの世界の条件は、論理が世界を秩序づけることであると理解できる。つまり、ある事態ないし事実の連関は、論理的連関であるからこそ、世界を構成するものとして経験される。

したがって、『論考』における論理は世界と関連して理解されねばならず、恣意的な事柄ではない。というのも、論理の源泉が「何が」という存在の措定に先行し得ない以上、それは対象の形式によって決定される。そして、対象の在り方、あるいは可能的な在り方が、論理によって考えられうる以上、その「何が」がそうでなかった場合という可能性を考慮することはできない。つまり、「何が」によって表わされている存在については、論理的可能性は考えられない。

しかし、こうした「何が」の存在による論理の非恣意性があるとして、ウィトゲンシュタインはなぜ論理の唯一性を考えたのか。

第2章 唯一の論理

第1節 世界と論理の関係

第1章で、『論考』の基本骨子の中に「論理的对象」の削除があることに触れた。そして、論理定項は真理操作として理解された。この論理定項の削除の結果、命題に現れる論理定項は、『論考』内の像理論が要求する対象との対応という問題とは無関係となる。つまり、論理定項は実在の側に対応する対象を持つ必要はない。この論理的对象の削除を、ウィトゲンシュタインは「根本思想（Grundgedanke）」として主張している^⑩。「「論理定項」はなんらかの対象の代わりをするものではない。事実の論理は記号で表しえない。これが私の根本思想である」（『論考』, 4.0312）。

ウィトゲンシュタインが、『論考』において、明示的に影響を受けた人物として述べている

のは、B・ラッセルと G・フレーゲの二人である。根本思想とウィトゲンシュタインが称している論理的对象の削除について、ウィトゲンシュタインと彼らは対立する。

ウィトゲンシュタインがラッセルの『知識の理論 (Theory of knowledge)』^⑪に対して批判的であったという話はしばしば取り上げられているが、この著書において見られるラッセルの立場は「論理的对象」を認める立場であった。ラッセルに従えば、私たちが論理に関わる命題を理解するためには、論理的对象との「面識 (acquaintance)」^⑫を有していなければならない。この論理的对象との面識がなければ私たちは論理的な事柄に関わる命題を理解することができないと、ラッセルは述べている。^⑬

フレーゲにおいても、数を自存的対象として理解する点において、「論理的对象」が関わっている。荒畑靖宏に従えば、フレーゲの論理主義の第一の目標は、「数が論理的本性をもつこと、数が自存的な対象であること、この双方を示すこと」^⑭である。

この「論理的对象」を認めるか否か、という点においてウィトゲンシュタインはラッセルとフレーゲから袂を分かť。

なぜウィトゲンシュタインは論理的对象の削除を根本思想と主張したのか。この点について、しばしば指摘されるのは、二重否定に関する問題である。論理定項が対象を有していると理解すると、 $\neg\neg P$ と P はそこに登場する名の数の違いによって、異なる命題として理解される。しかし、上記の二つの命題の意義は同値であるため、 $\neg$ の数は命題に対して新たな意義を付け加えない。そのため、真理操作として理解された否定は、論理空間における命題 P の領域を反転する操作として理解される。

加えて、前章で確認したように、言語の像理論を考慮すると、現実の像としての命題が互いに内的関係にあるのは、現実においてそもそもそのような内的関係が諸事態間にあるためだ。そして、諸命題が内的関係にあるのは、現実と論理形式を共有しているためである。

上述したように、論理定項の削除を根本思想としてウィトゲンシュタインは考えていたにもかかわらず、論理空間や論理形式が、存在論的な概念として独自の位置を有しているように考えられる。この位置付けの不明瞭さをウィトゲンシュタインはどのように扱うのか。

ウィトゲンシュタインは論理的对象を認めない。しかし、真理操作が可能であるのは、現実の内的関係が諸命題間に存するからだとも彼は考えている。論理的对象を削除した彼は、論理をどこに位置付けるのか。ラッセルとフレーゲであれば、論理という事柄を位置付けるのに論理的对象を用いることができた。しかし、ウィトゲンシュタインの場合には、それが不可能である。

『論考』における論理と世界の存在論のレベルでの関係を巡っては、しばしば以下の三つの立場が指摘されている。^⑮一つは、論理という何かは独立した実在であるというものである。こ

れは先に見たフレーゲやラッセルの立場に近い。次にその何かを主観の側に位置付ける理解である。そして、第三に、対象に内在するものとして理解する考え方である。

上記三点の内、第一と第二という明らかに取りえない立場を排除すれば、残されるのは第三の立場である。『論考』におけるウィトゲンシュタインも、同じ論理形式を有する対象の区別は、外的性質によるほかないと述べており（『論考』, 2.0233）、論理形式を対象が有していると理解できる。

第1章第3節で考察した論理と世界の関係から考えても、論理が人の主観に位置付けられているとは理解し難い。また、論理的对象の排除を根本思想として掲げる『論考』において、別種の論理的存在が認められるというのも同時に考え難い。特に論理的真理をトートロジーとして理解する『論考』においては、論理が独立した何かであると理解する道をとる必要がないと考えることもできる^⑬。それは、第1章で触れたトートロジーが、「現実」の像ではなく、「現実」の論理的性質を示すと言われている点に表われている。トートロジーは、像の諸規定に従えば、確かに「現実の模型」としての像ではないが、しかし同時に、「現実」と無関係でもない^⑭と理解できる。

論理命題と現実の関わりは、従って、論理命題がトートロジー（あるいは、矛盾）として表わされることによって世界の形式的性質を示す点にある。この形式的性質は、特に真理表における命題間の関係として示されることになる。

とはいえ、ウィトゲンシュタインはラッセルのように、論理学が現実の形式的性質を列挙することを目的とするとは考えない^⑮。ウィトゲンシュタインは、フレーゲとラッセルのように自然科学として論理学を捉えない。T・リケッツが指摘するように、彼はフレーゲとラッセルの意味での普遍主義を拒絶している^⑯。リケッツに従えば、フレーゲの科学としての論理学は、すべての諸科学を包含する一般的な枠組みを提供する。リケッツが指摘する通り、ウィトゲンシュタインは、こうした論理学観に基づくラッセルやフレーゲの意味での普遍主義者ではない^⑰。加えて、ポッターが述べているようにラッセルはあくまでも自然科学として論理学を捉えている^⑱。ウィトゲンシュタインにおいては、「哲学は自然諸科学の一つではない」（『論考』, 4.111）。第1章で確認したように論理的命題は、世界の形式的性質を示す役割を担うのみである。

ラッセルやフレーゲの普遍主義的解釈を、荒畑は以下の三点によって特徴づけている^⑲。

- (1) 彼ら〔フレーゲとラッセル及びホワイトヘッド〕の論理は、すべてを包括するという意味で普遍的である。
- (2) よって、論理を外側から眺めることのできるような視座は存在しない。
- (3) よって、論理的なものの一般や個々の論理的観念の本性を研究対象としたり、論理法則の真

理性や普遍性を正当化することを目指したメタ論理のようなものは、不可能である。

荒畑による以上の特徴付けのうち(2)と(3)は『論考』の立場に合致するものと理解できる。しかし、(1)については、ウィトゲンシュタインは異なる立場をとる。彼はラッセルやフレーゲのように、論理は現実に関わるものだと考えてはいる。しかし、自然科学的な諸法則を論理的法則には数え入れない。つまり、論理はすべてを包括するというフレーゲとラッセルの立場が、自然科学に関わる論理学を考えていたのに対して、ウィトゲンシュタインは論理的必然性を自然法則にまで拮据して考えなかった。経験的事実を前提とする帰納法による法則は、必然的に真(あるいは偽)な命題である論理命題とは異なる。経験的事実からの一般化である以上、その法則は事実に依拠している。したがって、ウィトゲンシュタインは次のように述べる。「帰納という手続きは、我々が経験と一致しうる最も単純な法則を想定する、という点に存している」(『論考』, 6.363)。

第1章でも触れた通り、『論考』における論理は、「何が」には先立たない以上、対象が存在しない場合には想定されえないと考えられる。つまり、対象とは独立に論理のみを理解する方針も破棄される²²。では、対象の相互連関こそが論理そのものなのか。以下の主張は、その立場にあることを示しているように見える。

この不変の形式はまさに対象によって作られる (『論考』, 2.023)。

したがって、論理的关系は、対象の存在によってその存在論的な位置を確保していると理解できる。そして、第1章で触れた「何が」と「いかに」²³の区別は、結局のところ、対象がいかにあるか(つまり、事実)に対して、論理は「対象がある」ことに基づくということを述べていると理解できる。

第2節 なぜ「唯一」であるのか

『論考』において、そもそも「論理」が唯一であるのは、二つの要因から考えることができる。一つは『論考』に内在的な側面であり、もう一つはフレーゲとラッセルの影響と批判という外在的な側面である。以下では内在的側面について論じた後、外在的側面について論じる。

第1項 内在的要因

『論考』の目的が、人間の思考の限界を明らかにすることである以上、表現上は異なっていようと全ての言語の根底に同一の構成原理が存在せねば、思考の限界を明らかにすることはで

きない。同一の構成原理が存在しないとすれば、ウィットゲンシュタインの試みが適用されるのは、同一の論理を有する言語のみに限られる。そのため、彼が述べているように、言語の表現上の違いは、言語における内的な事柄ではないのである（『論考』, 3.34）。それは、ウィットゲンシュタインが「像」としての言語を考察し、命題の分析をただ一つであると述べている点にも見られる（『論考』, 3.25）。したがって、命題の一般形式は、「唯一の論理」を前提として為された分析の結果であると理解できる。

そして、このように析出された命題の一般形式によって、仮に全ての要素命題が与えられたとすれば全ての命題が導かれることになるウィットゲンシュタインは述べる（『論考』, 4.52）。このことを端的に表現するのが、真理表である。第1章で考察した論理の役割に従えば、同様の秩序付けは現実においても成り立っている。論理と世界の限界が一致すると考える以上、『論考』において論理の外に世界は考えられない。これは、『論考』が想定する可能的事柄は論理空間にすべて属しているという考えによる。可能的な世界は、事態の成立・不成立の組み合わせによって網羅されるためである。

また、独我論に関する『論考』の主張において、言語と世界に関しては「私の」という限定が付されているのに対して、論理については、M・ブラックも指摘するように、一度も「私の論理」とは述べられていない²⁴。つまり、言語による対象の切り取り方とそれによって構成される世界に関しては各人によるものの、対象によって構成される命題の相互連関は論理によって定まっていると理解できる。これは、ウィットゲンシュタインが命題を、真偽の配列つまり真理表として理解している点からも明らかである。

論理のア・プリオリ性について、ウィットゲンシュタインは、「論理がア・プリオリだというのは、論理に反しては思考不可能ということにほかならない」（『論考』, 5.4731）と主張する。この主張は、前節で述べた対象の形式に論理が依拠するという観点から考えるのであれば、対象の形式に基づく以外の論理は、端的に思考できないということを述べていると理解できる。これまで述べてきた通り、論理は「何が」には先立たないということは、そもそも論理が何らかの対象という存在なしには成立しえないことである。論理のア・プリオリ性は、論理がこの「何が」以後にある以上、源泉とする「何が」と相即的であると考えられる。そのため、論理に反して思考不可能であるというのは、私たちの思考がその「何が」によって形成される論理的关系以外にはありえないことを指している。したがって、論理に反しての思考は、そもそも原理的に否定される²⁵。

こうした形でア・プリオリ性を認めることは、各人の論理空間を考える時に、共通する事柄として論理を承認することである。つまり、まったく異なる論理を他者が有するのであれば（すなわち「私の論理」）、日常言語における相互理解という側面は不可能となる。ウィットゲンシ

ユタインは、名の指示対象としての「対象」が説明される必要性を主張するのと同時に、「我々は命題によって諒解しあうのである」（『論考』, 4.026）と述べている。そのため、論理空間を構成するものが異なり、さらには形式すらも異なるということは、本質的に他者はまったく異なる論理空間を構成していることになる。こうした場合、その他者の論理空間を、論理空間と呼ぶことすら不可能となり、私たちは命題によって諒解しあうことが不可能となる。

しかし、ウィトゲンシュタインは、論理のア・プリオリ性を上記のように理解することから、このア・プリオリ性を私たち（Wir）が考えることができないことと述べるのであって、私（Ich）が考えることができないこととは述べない（『論考』, 6.51）。つまり、「私の論理」というものを想定していない。これによって、日常言語に見られる相互理解という側面を保つことができる。

したがって、『論考』が依拠する論理は、表現に関する文法的事柄のような一種のルールであると捉えることはできない。ウィトゲンシュタインは恣意的に論理法則を立てることを認める立場にはない。

以上より、内在的側面において論理の唯一性が主張されるのは、以下の二点を明確にするためであると考えられる。第一には命題の一般形式という分析の終点があることであり、第二には像的性格を有する言語の限界が、私たちに共通しているということである。

第2項 外在的要因

ラッセルおよびフレーゲの立場と、ウィトゲンシュタインの立場の相違は、論理において公理のような特権的な命題を認めるか否かという違いにある。

ウィトゲンシュタインが、ラッセルおよびフレーゲと同じ古典論理を土台としていても、しかし彼らの記号法や論理学に対して批判的であったのは、前節で見たように彼らが論理学を最大限一般的な法則として論理を理解していた点にある。

論理学で扱われる論理的関係が、世界にも関わるというのに、それが互いに定義しあうことによって削除することが可能であるという考えは、ウィトゲンシュタインには受け入れられない。論理が世界の形式的性質に関わるのであれば、それは世界にとって内的＝本質的なものであって、人の恣意的な取り決めによって削除することはそもそも考えられない。したがって、真なる論理定項はただ一つであり、それは世界の本質を提示しているとウィトゲンシュタインは主張した（『論考』, 5.47; 5.472）。

フレーゲとラッセルの立場には、ウィトゲンシュタインはどのような問題があると考えたのか。それは、リケッツが述べているように、ウィトゲンシュタインがルイス・キャロルの無限後退と類似の考えを有していた²⁶というものである。キャロルのパラドクスは、三段論法を正当

化しようと試みると、それは無限後退に陥るというものである。つまり、 p と $p \rightarrow q$ から q が推論されるということを、「 p と $p \rightarrow q$ から q を推論可能である」という公理的な命題（S1 とする）から導出すると、次に問題となるのは、なぜ p と $p \rightarrow q$ と S1 を認めると q を導出してよいのか、と再度問われることとなる。これに対して、先と同様の手順で、公理的命題 S2 を立てても、今度は再度 S2 を含めた形で正当化の命題を立てなければならないという無限後退に陥る。²⁷⁾

ウィトゲンシュタインによるキャロルの無限後退への直接的な言及は²⁸⁾ない。だが、類似の考えを彼が有していたと推察できる発言は、『論考』においても確認することができる。例えば、次のような主張である。

p が q から帰結する、そのとき私は q から p を推論することができる。つまり、 p が q から導出される。

推論の仕方はただ二つの命題からのみ、見て取られる。

それら二つの命題、それ自身だけが、推論を正当化しうるのである。

「推論法則」、すなわち——フレーゲとラッセルがそうしたように——推論を正当化するものとして立てられた命題は、無意味であり、立てたところで余計なものでしかない（『論考』, 5.132）。

ここで利用される表記法として、ウィトゲンシュタインは第 1 章で触れたとおり、真理表を採用した。

このように、ウィトゲンシュタインは明らかに推論を正当化する何か——推論法則や推論規則、公理——を改めて言語において明示することに対して否定的である。したがって彼は、真理表という記号法を用いる。真理表は、諸命題の内的関係を明らかに表現するために採用されている。したがって、ウィトゲンシュタインは、論理を語りえない事柄として『論考』の体系内に位置付けたと推察できる。

第 3 章 『論考』の問題点と「唯一の論理」

第 1 節 論理の唯一性からの帰結——文法の唯一性

これまで論じてきたことから、『論考』の体系は、以下の主張をしていると考えられる。

- ① 言語の像的性格
- ② 要素命題の相互独立性

③ 論理の非恣意性

④ 論理の唯一性

これらの主張によって、『論考』において設定された言語の限界を明らかにするという問題の解決を、ウィトゲンシュタインは図ったのである。

しかし、『論考』には、これまで多くの問題点が指摘されてきた。もっとも初期には、色命題に関する問題があり、他に技術的な問題として多重量化の問題があるとされている。野村は、像理論の核である論理形式の共有に関して、色命題に関する問題と対象領域の無限性に関する問題という二点を『論考』の体系崩壊の原因として論じている。²⁹『論考』の問題点のうち、本稿は主として色排除の問題を中心に検討する。

色命題に関する問題の指摘は、F・P・ラムジーによる「書評」においてなされた。³⁰色命題に関する問題は、『論考』の認める必然性と不可能性が、「論理的」必然性・不可能性のみであることに起因する（『論考』, 6.375）。この考えに従えば、異なる色命題の連言が不可能であるのは、論理的不可能性によらねばならない。だが、『論考』ではそれがどのようにして論理的に不可能であるのかが示されていない、というのがラムジーの指摘である。

例えば、『論考』に従って、「xは赤であり、かつ、xは緑である」という色命題を考えてみる。仮にこれらの色命題が要素命題で相互独立であるならば、連言を構成する各々の命題が真であるとき真となる。しかし、ウィトゲンシュタインは『論考』において次のように述べている。「例えば二つの色が同時に視野の中の一つの場所にあることは不可能、しかも論理的に不可能である。このことは色の論理構造によって排除されているからである」（『論考』, 6.3751）。したがって、上記の連言命題は次のいずれかであらねばならない。すなわち、要素命題であるか、未分析の命題であるかのいずれかである。仮に前者を認めてしまった場合には、『論考』の体系では、要素命題の論理的な相互独立性に反してしまう。そのため、ウィトゲンシュタインが取るべき方向は先の色命題のさらなる分析になるが、これは『論考』でなされておらず、結果としてラムジーに批判されることとなった。この色命題に関する問題は、復帰後に意識されるようになっていることはしばしば指摘されており、また、次節でも扱う通り、中期への移行という点から見ても重要である。

第2節 破棄と維持

前節で確認した通り、論理的必然性のみを認めつつ、色命題を維持しようとするのであれば、『論考』の目的は、真理表による命題の構成限界をどのように明示するのかという問題を抱える。というのも、第1章で確認した通り、思考の可能性の限界を明らかにするには、要素命題

は論理的に相互に独立していなければならないからである。

この要素命題の論理的な相互独立性の問題については、ウィトゲンシュタイン自身も復帰当初から検討しており、「論理形式について」と題する論文において色命題を巡って考察を展開している。

上記の論文におけるウィトゲンシュタインの基本的な立場は、要素命題の論理的な相互独立性を依然として認めるものであるように見える。ウィトゲンシュタインは、そもそも、存在者の形式を適切に反映している言語であれば、色命題に関する問題は生じないと考え、以下のよう述べている。例えば、色を項とする1つの空所を有する $[\]PT$ ($[\]$ は色、 P は場所、 T は時間を表す)という命題関数が、現実の形式を反映しているとする、 $RPT \wedge BPT$ という命題が成立しない。というのも、存在者の適切な形式に従っている構文論によれば、そもそも同じ P と T を有する命題はただ一つのみしか成立しないからである(『論理形式』, pp.369-370.)。つまり、先の連言命題は、 RPT と BPT という両命題が真の場合に偽になるのではなく、そもそも両命題が真である可能性が構文論によって排除されているのである。そのため、真理表には、そもそも両命題が真の場合という組み合わせが初めから登場しない。こうした考察から、色排除問題が生じるのは、私たちが依然、適切な構文論を採用できておらず、分析の途上にあることを示している。これが、『論理形式』におけるウィトゲンシュタインの主張である。^③

また『論理形式』において、色命題については、要素命題の論理的な相互独立性を適用しない方法を模索している。それは例えば「度合い」という概念の導入によって、形式に数的な性質を認めることや、先に触れた通り構文論のレベルで排除されていなければならないという主張に見られるように、色命題はあくまでも「排除」しあうのであって「矛盾」するのではないと彼が注意を促している点に明らかである。つまり、一般に相互独立性の破棄として読まれるこの論文におけるウィトゲンシュタインの立場は、依然、論理的な相互独立性は維持されるが、しかし構文論によってそもそもそのような結合は生じえないと考えていたと理解できる。

ウィトゲンシュタインのこのような考えは、同時期に書かれていた『哲学的考察』(以下『考察』)においても見られる。ウィトゲンシュタインは色命題の文法について、八面体を利用して色の文法を捉えなおそうと試みている(『考察』, § 1)。加えて、構文論による色命題の連言の排除という考えも、『考察』に見受けられる(『考察』, § 86)。こうした構文論による色命題に関する連言命題の排除は、意味(Bedeutung)によって論理的構文論が影響されているため、『論考』が著された前期ウィトゲンシュタインの思想と明確に異なる。

ただし、『論考』の目的を破棄したと理解できる主張が、『考察』には見受けられる。言語の限界を明らかにするという『論考』の課題に対して、ウィトゲンシュタインは、『考察』で、「言語の中で世界を限界づけ、際立たせようとする試みが、再三生じてくる。しかしそれは成

就しない」(『考察』, §47)と述べている。

では、その他の考えはどうか。これまで論じてきた中で、論理の非恣意性をその一つの根拠として唯一性の考えが導かれると述べた。『考察』におけるウィトゲンシュタインは、依然として論理を非恣意的な事柄として理解していたと考えられる。確かに、前期の要である論理などを「文法」概念へと移行させることで、前期において展開された論理を言語と世界を限界づける原理として単独では扱っていない。しかし、『考察』期の彼は、H・グロックも指摘しているように、「文法」を非恣意的な事柄として理解していた。³²それは前期において見られた、言語の本質を像として理解する考察を、『考察』期においても維持しているためである。彼は「言語の本質は世界の本質の像である」(『考察』, §54)と主張している。これは、依然として、『論考』においてみられた言語の像理論の思想が維持されていることを示していると理解できよう。『論考』におけるウィトゲンシュタインにおいても、言語の本質、すなわち命題の一般形式は世界の本質を提示するものであった。この「言語に世界の本質が反映されている」という思考において、『論考』期と『考察』は連続している。

同時に論理の概念は、文法の一部として捉え直されている(『考察』, §83)。これは主に要素命題の概念が変化したことによる。日常言語の根底には、論理によって秩序付けられた像的言語があると考えられていた。色命題に関する問題を指摘された後のウィトゲンシュタインは、対象に認めていた色の形式を「文法」概念へと拡張することで、論理に従う論理的に完全な構文法という考えを破棄する。そして、前期においては無視されていた対象間の関係による意義への影響を考慮した「文法」概念を展開することになる。したがって、論理定項は「包括的な文法」の部分ではあるが全てではないと言われることになる(『考察』, 同上)。こうして、前期に見られた論理は、この「文法」の概念に包括されることになる。

ただし、論理の唯一性と非恣意性は「文法」概念に包括される形で維持される。それは、先にも述べた通り、「文法」は世界の本質の像であると言われており、そのために「文法」は非恣意的であると理解できるからである。それは、ウィトゲンシュタインが、哲学の役割を「文法の管理人(Verwalterin der Grammatik)」であると述べている点にある(『考察』, §54)。この文法の管理人の哲学は、依然、世界の本質を把握できると考えている点にある。つまり、言語の像理論は維持されている。

論理のみを言語の構文法としていた前期の思想的立場からの離脱は、論理形式の変化も同時に含んでいる。像理論の核は、言語と世界に共有されるものとしての論理形式があった。こうした論理形式の概念が「文法」の概念へと変容したのかと問われればそうではない。中期におけるウィトゲンシュタインは、言語が世界について語ることができることについて、その確信を変化させている。「というのも、言語はその意味の仕方を、言語の意味である世界からも

ともと得ているので、この世界を描出しない言語など考えられないのである」（『考察』, §47）。前期においては、世界を描写することができる言語に対して、論理形式の共有という考えを打ち出していたウィトゲンシュタインは、中期になると、言語の本質が世界の本質の像であるという考えを維持しながら（つまり、言語の像理論）、言語が世界を描写することができるのは、それが世界の内に存しているためであるという考えに移行している。

結論

本稿の問題を再確認しこれまで論じてきたことのまとめと結論を述べる。

本稿の問いは、前期ウィトゲンシュタインに特に顕著に見られる「唯一の論理」という思想を明らかにし、中期ウィトゲンシュタインがどのように「唯一の論理」を維持していたのか、その行方を論じることであった。

上記の問いを解決するために、本稿では、第1章で前期の主著『論考』における論理の役割の観点から考察を行った。まず『論考』における目的と方法を示し、次いで言語における秩序付けの役割を論理が担っていることを論じた。そして、世界と論理の関係を三つの特徴を指摘した。第2章では、第1章で論じた論理について、論理の存在論的位置付けとなぜ唯一であるのかについて考察を行った。第3章では色命題に関する問題から生じた変化に焦点を当て、中期において「唯一の論理」がどのように扱われているかを考察した。

結論は次の通りとなる。『論考』における論理は、言語に対しては構文論として秩序付けを行い、世界に対しては諸事態間の内的関係として世界の論理的な秩序付けに関わっている。そして、『論考』における論理は、対象の存在によってその存在論的な位置を確保している。ところで、こうした論理が唯一であるということは、内在的側面と外在的側面から捉えられる。その唯一性は、内在的には、命題の一般形式が唯一であるという分析結果を得るために、論理が唯一であらねばならないということ、そして論理は「何が」の存在に先立つことはできないという、論理のア・プリオリ性の二側面から、理解できる。外在的側面としては、ラッセルとフレーゲに対するウィトゲンシュタインの公理的体系への批判がある。そしてウィトゲンシュタインは、中期においては、色命題に関する問題によって、要素命題に対する見直しと論理形式の概念の変更を余儀なくされた。そのため、前期においては論理的構文法として中心的な役割を担っていた論理は、「包括的な文法」概念の一部として扱われることになる。

参考文献

『論考』への参照については命題番号を、『考察』への参照は断章の番号を示す。『論考』の引用に際しては野矢訳および奥訳を参照した。また、『考察』については奥訳を参照した。

○一次文献

- Wittgenstein, L. (1962) *Tractatus logico-philosophicus*, trans. and ed. C.K. Ogden, Routledge and Kegan Paul
- ウィットゲンシュタイン, L. (2001a) 『ウィットゲンシュタイン全集1』 大修館書店
- (奥雅博訳) (2001b) 『論理哲学論考』 (ウィットゲンシュタイン (2001a), pp.3-120.) 所収
- (奥雅博訳) (2001c) 『草稿1914-1916』 (ウィットゲンシュタイン (2001a), pp.121-357.) 所収
- (奥雅博訳) (2001d) 『論理形式について』 (ウィットゲンシュタイン (2001a), pp.361-370.) 所収
- (黒崎宏訳) (2001e) 『ウィットゲンシュタインとウィーン学団』 ((2001) 『ウィットゲンシュタイン全集5』 pp.1-378. 大修館書店) 所収
- (野矢茂樹訳) (2003) 『論理哲学論考』 岩波文庫
- (奥雅博訳) (2008) 『哲学的考察』 ((2008) 『ウィットゲンシュタイン全集2』, pp.1-404. 大修館書店) 所収
- Russell, B. (1992) *Theory of Knowledge*, Routledge
- (2010) *Principles of Mathematics*, Routledge
- ラッセル, B. (石本新訳) (1971) 『外部世界はいかにして知られうるか』 ((1971) 『世界の名著58』 pp.81-304. 中央公論社) 所収

○二次文献

- Black, M. (1964) *A Companion to Wittgenstein's Tractatus*, Cambridge
- Diamond, C. (2001) *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*, the MIT press
- Glock, H. (1996) *A Wittgenstein Dictionary*, Blackwell
- McGinn, M. (2009) *Elucidating the Tractatus*, Oxford
- Potter, M. (2009) *Wittgenstein's Notes on Logic*, Oxford
- Ricketts, T. "Pictures, logic, and the limits of sense" pp.59-99. Sluga, H. Stern, David, G. eds. *The Cambridge Companion to Wittgenstein*, (1996), Cambridge
- Stenius, E. (1960) *Wittgenstein's Tractatus*, Greenwood press
- von Wright, G. H. (1955) "Ludwig Wittgenstein, A Biographical Sketch," *The Philosophical Review*, Vol. 64, No. 4, pp.527-545.
- キャロル, L. (柳瀬尚紀編訳) (2005) 『不思議の国の論理学』 ちくま学芸文庫
- マーコム, N. (藤本隆志訳) (1971) 『放浪 回想のウィットゲンシュタイン』 法政大学出版局
- ラムジー, F.P. (中平浩司訳) 「書評」 ((2005) 『論理哲学論考』 pp.177-207. ちくま学芸文庫) 所収
- 荒畑靖宏 (2019) 『世界を満たす論理』 勁草書房
- 飯田隆 (1989) 『言語哲学大全Ⅱ』 勁草書房
- 飯田隆 (2005) 『ウィットゲンシュタイン』 講談社
- 伊藤邦武 (1988) 「ウィットゲンシュタインにおける言語の自律」 (井上庄七, 小林道夫編 『自然観の展開と形而上学』 pp.295-322. 紀伊国屋書店) 所収
- 大辻正晴 (1996) 「論理の生成——初期ウィットゲンシュタインの論理観について——」 (『科学基礎論研究』, 24巻, 1号, pp.17-22. 科学基礎論学会) 所収.
- 末木剛博 (1977) 『ウィットゲンシュタイン 論理哲学論考の研究Ⅱ』 公論社
- 高村夏輝 (2007) 「訳者解説」 ((2007) 『論理的原子論の哲学』 pp.248-290. ちくま学芸文庫) 所収
- 野村恭史 (2006) 『ウィットゲンシュタインにおける言語・論理・世界』 ナカニシヤ出版

野矢茂樹 (2006) 『論理哲学論考を読む』 ちくま学芸文庫

野矢茂樹 (2013) 「訳者あとがき」 ((2013) 『ウィットゲンシュタインの講義 1932-1935年』 pp. 508-529. 講談社学術文庫) 所収

吉田寛 (2009) 『ウィットゲンシュタインの「はしご」 『論考』 における「像の理論」と「生の問題」』 ナカニシヤ出版

註

- ① Cf. 吉田 2009, pp.3-24.
- ② Cf. Diamond 2001, pp.179-204. ダイヤモンドに従えば、現実の特徴が示されている命題があるという主張は破棄されなければならない (Diamond 2001, p.181.). TLP を理解した場合、最終的にそうした主張の一切がナンセンスであるとして投げ捨てられなければならないと彼女は述べる。この観点から、特に P.M.S.ハッカーが批判されている (Diamond 2001, p.194.).
- ③ Cf. 伊藤 1988, p.308.; 野矢 2013, p.510.
- ④ Cf. 飯田 2005, pp.94-98.
- ⑤ Potter 2009, p.65.
- ⑥ Cf. Stenius 1960, p.177.; 野村 2006, pp.14-15.
- ⑦ 本稿では『論考』における「対象」が何であるのか、という点については論じない。その理由は二つある。第一の理由は、マーコムが『論考』の対象の具体例をウィットゲンシュタインに尋ねた際に、ウィットゲンシュタイン自身が対象の例を挙げなかったこと (マーコム 1971, pp. 143-144.) である。第二の理由は、『論考』は「知識の確実な源泉は何か」という意味での認識論には関わらないためである。
- ⑧ 末木は世界を二つに (Cf. 末木 1977, pp.3-5.)、野矢は三つに区別する (野矢 2006, p.223.). 末木の区別は、本稿の(1)と(2)におよそ対応する。野矢の区別は、(1)に関しては同じであるが、残りの二つに関しては、対象の総体としての世界、永遠の相の下に捉えられた世界を挙げている。これらが論理的分析の結果として得られる『論考』の世界概念であると野矢は述べている (野矢 2006, p.293.).
- ⑨ 「倫理は世界に関わらない。倫理は論理と同じく、世界の条件でなければならない。」 (『草稿』 1916/7/24)。
- ⑩ 主に、fundamental thought (Ogden 訳) と fundamental idea (Pears, McGuinness 訳) の二通りの訳がある。Black は basic idea としている (Black 1964, p.173.). 「根本思想」を、「中心的な主張」として理解することに Potter は『論考』の命題番号のシステムから疑問を述べている (Potter 2009, p.61.).
- ⑪ Cf. 吉田 2009, pp.93-94.; 高村 2007, pp.280-289.
- ⑫ “acquaintance”をどう訳すかは課題であるが、本稿では、ラッセル『論理的原子論の哲学』において高村夏輝が使用している訳語「面識」を採用した。
- ⑬ Cf. Russell 1992, pp.97-101.
- ⑭ 荒畑 2019, p.33.
- ⑮ 吉田の区別に従う (Cf. 吉田 2009, pp.101-112.). しばしば、プラトニズムが対立する一方に置かれるが、他方は定まっていない。例えば、野村や飯田はミルを取り挙げて対立させている (Cf. 野村 2006, p.219.; 飯田 1989, pp.22-25.). 他に、規約主義を立場として挙げているものもある (大辻 1996, p.17.).
- ⑯ しかし、末木剛博は、論理の存在論的な問題について、この問題は、『論考』におけるプラト

ニズム排除の不徹底に起因すると指摘している（末木 1977, p.232.）。

- ⑰ ラッセル 1971, p.135.
- ⑱ Cf. Ricketts 1996, pp.59-64.; McGinn 2009, pp.210-211.
- ⑲ 1912/6/22にラッセルに宛てた書簡で「論理学は他の科学とは全く異なった種類のものとされねばなりません」と述べている（ワイトゲンシュタイン 2001, p.339.）。
- ⑳ Potter 2009, p.61.
- ㉑ 荒畑 2019, p.160. [] は引用者による。
- ㉒ この点で、対象を欠いている世界には論理もないと考えられる。そのため、野矢の「そして、論理空間が存在しないところでただ論理語の操作だけを掲げても、空しい。論理空間が存在しなければ、論理はその仕事場を失う」（野矢 2006, p.188.）という主張については、操作としての論理の位置が不明瞭であるとする。つまり、対象が存在しない場合には内的関係があり得ないため、そもそも論理語の操作自体が成立しないと考えられる。
- ㉓ この点において本稿は、恐らく Glock と同様の立場にある。ただし、Glock は「命題の論理形式はその構成要素の論理形式によって決定される」と述べている。また、命題の論理形式については「ある種の構造の可能性」と述べているにとどまる（Cf. Glock 1996, pp.214-215.）。
- ㉔ Black 1964, p.307.
- ㉕ この「何が」の領域における対象の経験は、経験と呼ばれるものではないとワイトゲンシュタインは述べている（『論考』, 5.552）。ワイトゲンシュタインは神秘的な事柄として「世界がある」ということを捉えている（『論考』, 6.44.）。
- ㉖ Ricketts 1996, p.63.
- ㉗ キャロル自身の説明は、三角形の二辺の等しさの証明を例としている（Cf. キャロル 2005, pp. 16-23.）。
- ㉘ ウイトゲンシュタインによる直接的な言及はないが、ラッセルの『数学の諸原理』には、このキャロルの無限後退に言及した箇所がある（Cf. Russell 2010, § 38.）。この著書は、ワイトゲンシュタインに深い影響を与えた一冊として言及されている（von Wrigth, p.530.）。
- ㉙ Cf. 野村 2006, pp.226-246.
- ㉚ Cf. ラムジー 2005, pp.194-195.
- ㉛ ウイトゲンシュタインは「命題の内部構造」を考えていなかった点を自身の誤りとして語っている。この時期のワイトゲンシュタインは、依然として、命題の分析結果である要素命題は対象の直接的な結合であると考えている。しかし、要素命題の相互独立性については誤りを認めている（ワイトゲンシュタイン 2001e, p.105.）。
- ㉜ Glock 1996, p.46.